

報告書

日時

2025 年 3 月 22 日（土）9:00-18:00

場所

協同組合技術者育成協力会 TECS 研修施設「木鶏の杜」

参加者

15 名（ミャンマー出身の実習生 10 名および広島大学で日本語教育を専攻する学生 5 名）

主催

ダイバーシティ研究センターおよび日本語教育学プログラム

協力

監理団体「協同組合技術者育成協力会」（略称 TECS、広島市）

概要

本ワークショップは「外国人実習生と大学生の協働ボディマッピングについての研究」の一環として行った。

ワークショップには、本学で日本語教育を学ぶ大学生 5 名と、ミャンマー出身の実習生 10 名が参加した。後者は、入国後 1 か月間、東広島市の研修施設で日本の生活について研修中だった。ワークショップでは、大学生 1 名と実習生 2 名で小グループを作り、たがいにマップの内容を共有しながら、マッピングを進めた。研究の目的は（1）声が聞かれにくい実習生の生活世界をとらえること、そして（2）日本語教育専攻の大学生と、同世代の日本語学習中の実習生が、ライフストーリーを共有しながらマッピングをすることで、自他の認識と関係がどう変容するかを知ることにある。

*ボディマッピングとは、自分の体の形を 1 メートル×2 メートル程度の紙にかたどって、そこに自分の暮らしや考えを絵と言葉でマッピングするアート実践である。2002 年に南アフリカで HIV とともに生きる女性たちのあいだで実施されて以来、世界各地で、周縁化された人たちによる表現として活用され、研究されてきた。ダイバーシティ研究センターは、これまで、技能実習生や被爆者のボディマッピングを実施してきた。

報告

ダイバーシティ研究センターは、2024 年 2 月に TECS スタッフ 4 名を対象に、さらには 2024 年 3 月にミャンマー出身の実習生 7 名を対象にして、ボディマッピングのワークショップを実施し、ボディマッピングが自己を見つめ直し、チームビルディングに寄与することを確認していた。また、2024 年 6 月には教養科目「地域社会を学ぶ」で受講生 12 名を TECS での研修に参加させ、米国 NPO の CEDAR の教育理論を用いたワークショップを 1 泊 2 日で行い、同年代の大学生と実習生の交流が自他認識と自他関係の変容に寄与することを確認していた。

今回のワークショップは、当センターと本学大学院人間社会科学研究科日本語教育学プログラムと共同で主催し、ボディマッピングというライフ・ライティングを、日本語教育を学ぶ大学生と日本語を学ぶ実習生が共有しながら実施することで、双方にどのような変容をもたらすかを探った。近年の教師教育において、教師自身が自分の身体を使いながらリフレキシブに他者との関係性を作りあげることの重要性

が指摘されている。日本語教育に教師として関わる可能性のある学生が、日本語学習者と協働してボディマッピングをすることで、それぞれがどのように自分の在り方や世界観を更新するのか、また、いっしょにマッピングをした日本語学習者とどのような関係性を作り上げるのかを明らかにすることを目的とした。

ワークショップは 9:00 に開始し、1 時間の昼休憩をはさんで、18:00 に終了した。昼食はミャンマーの料理を実習生と大学生で作って食べた。TECS のスタッフは「実習生がふだん日本語教師と日本語で話しているときとまったく表情が違う」と述べ、同年代の日本人との交流が実習生にとって貴重な体験であることを強調した。また、大学生は「家族構成とか恋人がいるかどうかとか、個人的なこともマッピングのおかげで共有できた」「コロナや戦争で大変なおもいをして今ここにいて、だからお金を稼ぐことが大切になるんだと知って、つらい気持ちになった」「自分におきたつらい体験も、それが今につながっていると分かって前向きになれた」と述べた。

今後、参加した実習生にマップについての作文を書いてもらい、大学生にはインタビューを実施する。これらのデータと、完成したマップおよびマッピング中の会話を分析して、日本語教師を目指す大学生と日本語学習者がライフ・ライティングをともに行うことの作用を明らかにする予定である。



マッピングの様子



マップの内容を共有する様子



いっしょに料理をする様子